



埼玉県立  
歴史と民俗の博物館

# THE Ai MUSEUM

Vol.13-1 第37号 2018.7.6

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

**企画展**

## 古文書大公開!

一みる・よむ・しらべる埼玉

2018年  
**7月14日(土)**  
**~9月2日(日)**

〈休館日〉月曜日  
ただし7月16日・8月13日は開館

〈観覧時間〉  
●7月14日(土)~8月31日(金)  
9時~17時(観覧受付は16時30分まで)  
●9月1日(土)~2日(日)  
9時~16時30分(観覧受付は16時まで)

〈観覧料〉  
一般 400円、高校生・学生 200円  
※中学生以下と障害者手帳等をお持ちの方(付添1人を含む)は無料

〈展示内容〉  
1. 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡  
2. 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡  
3. 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡  
4. 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡  
5. 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡 武蔵国三好郡

本展覧会は、県立歴史と民俗の博物館、県立文書館の両館共催で、鎌倉時代から江戸時代までの「古文書」約200点を一挙に「大公開!」するものです。

古文書は読むことが難しく、一見すると難解な印象を与えます。しかし古文書は、読むだけでなく、形や紙の質を見るだけでも、多くのことが分かる、<sup>ふところ</sup>懐の深い資料です。そこで本展では、古文書の形

を見る(みる)、文字を読む(よむ)、内容を調べる(しらべる)ことを通じて、古文書、そして埼玉県の歴史について理解を深めていただくことを目指します。

展覧会では、他にも小学生向けワークシートや、ジュニア博物館講座「和本を作ろう!!」など夏休みの宿題にもピッタリのイベントが目白押し。皆様の御来館をお待ちいたします。





## 第1章 中世の古文書

### I 武蔵武士の時代

埼玉県域を含むかつての武蔵国に本貫地を持つ武士団は「武蔵武士」と呼ばれています。彼らが最も活躍したのが、鎌倉時代でした。

治承4年(1180)に源頼朝が挙兵し、その後鎌倉幕府が成立すると、武蔵武士たちは幕府に属す御家人として、日本列島全体に勢力を広げていきました。

今回の企画展では、国宝「金沢文庫文書」及び「称名寺聖教」(称名寺蔵、神奈川県立金沢文庫管理)を始め、「源頼朝筆書状」(公益財団法人遠山記念館蔵、8月7日～9月2日のみ展示)などの重要文化財を展示するほか、県指定文化財「安保文書」の県立文書館所蔵本と横浜市立大学学術情報センター所蔵本の大部分を一挙に公開します。

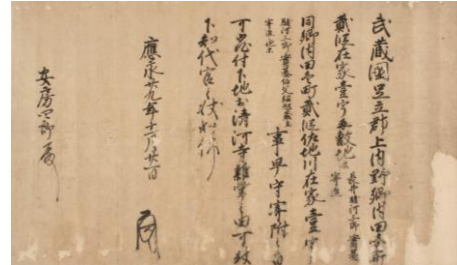


埼玉県指定文化財 安保文書の内 関東下知状  
(埼玉県立文書館蔵)

### II 鎌倉公方の時代

鎌倉幕府の滅亡後、足利尊氏が京都に室町幕府を開くと、日本列島は南北朝の動乱の時代へと突入していきました。尊氏は子の基氏を鎌倉公方として関東に派遣し、東国の行政を任せました。

基氏の死後は、その子孫が代々この職を継承しますが、永享11年(1439)に持氏の代、幕府によっていったん滅ぼされてしまいます。



埼玉県指定文化財 清河寺文書の内 足利持氏御判御教書  
(清河寺蔵、埼玉県立文書館寄託)

### III 戦国武将の時代

足利持氏の死後、その遺児成氏は鎌倉から古河に本拠を移し、古河公方と呼ばれました。

関東地方では、古河公方、関東管領上杉氏、戦国大名小田原北条氏・越後上杉氏・甲斐武田氏、さらに幸手城主一色氏・岩付城主太田氏・忍城主成田氏など、埼玉の武将たちによる戦乱が繰り広げられました。

そして最終的に、北条氏が北武蔵を平定しましたが、天正18年(1590)に豊臣秀吉によって滅ぼされ、関東の戦国時代は終わりを告げました。



埼玉県指定文化財 縹糸威最上胴丸具足  
(古河公方足利政氏所用)  
(埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵)

本章では、上記の戦国武将文書のほか、中世における神仏と人々との関わりや、花押・ハンコのデザインなどを取り上げたコラム展示も行います。





## 第2章 近世の古文書

### I 戦乱から太平の世へ～文書時代の到来～

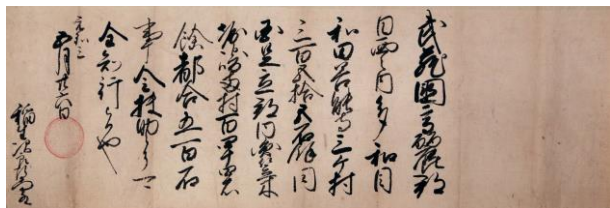
天正18年(1590)に関東に入国した徳川家康は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに勝利し、江戸幕府を開きます。

江戸時代は、文字を使用する機会が増加し、それまでに比べて文書の作成量が格段に増加した時代です。政治、商売、村の運営など、あらゆる面において文書が作成され、文書を介したやりとりが基本となりました。

紙と墨と筆の大量生産、全国流通や、幕府や大名で用いられた書風が全国に普及したことも大きな要因でした。その結果、中世までの形態や様式の範疇に入らない様々な文書が生み出されました。

### II 武士たちの世界～武家に残された文書～

武家文書は、武家(将軍、大名、旗本など)が発給・授受した文書です。江戸時代の埼玉県域には、将軍直轄の幕領の他に、譜代大名や多くの旗本領が所在していました。これら大名や旗本には、幕府の要職を務めた人物も多くいます。しかし、藩主の転封や、旗本の江戸居住などにより、県内に伝わる武家文書はわずかな数に留まります。本節では、主に岩槻藩主阿部家、岡部藩主安部家、旗本稲生家に関する文書を紹介します。

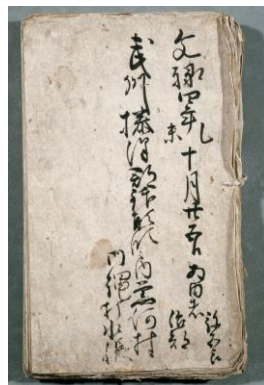


「稲生家文書」のうち 徳川秀忠朱印状  
(個人蔵、埼玉県立文書館寄託)

### III 名主・役人たちの世界～村や在地に残された文書～

村で作成・授受された文書を地方文書と呼びます。これらの文書は、主に名主など村役人を務めた家に伝えられています。文書には、検地帳・名寄帳、五人組帳、宗門人別帳などの基本的帳簿類のほか、触書、年貢割付、皆済目録など領主からの下達

文書、様々な訴状・願書などの上申文書と、村内で作成される議定書や各種の証書類からなります。本節では、こうした一般的な地方文書の他、胃山の豪農根岸家や、紀州鷹場鳥見役を務めた日光御成道大門宿の会田家など特徴ある文書を取り上げます。



埼玉県指定文化財  
持田家文書の内  
武州榛沢郡鉢形領之内  
荒河村御繩打水帳  
(個人蔵、埼玉県立文書館寄託)

### IV 教義と信仰の世界～寺院に残された文書～

江戸時代の寺院は宗教組織である一方、寺請制度を担うなど、幕府の政治体制に組み込まれた存在でもありました。また時に寺社は領知を安堵された「領主」でもありました。

そのため寺院には、寺院の運営や宗教の教義に関する古文書のほか、社会制度や寺領支配に関する文書なども残されています。しかし寺院文書は、宗派、寺院の規模や寺格などによって、そのあり方は様々でした。本節では、甘棠院(久喜市)や明星院(桶川市)、養竹院(川島町)などの文書を紹介します。



埼玉県指定文化財 明星院文書のうち  
徳川家康関東新義真言宗法度  
(明星院蔵、埼玉県立文書館寄託)

県内で過去最大の古文書の展覧会となります。ぜひ御来館下さい。(展示担当 根ヶ山・中村)



## 埼玉の“円空さん”

6月19日（火）から9月2日（日）まで、当館常設展示室第4室（美術展示室）において「円空仏」を公開します。

江戸時代前期の僧侶である円空は、全国各地を旅しながら仏像・神像を数多く制作しました。円空の作った仏像は、平安時代や鎌倉時代の古い仏像とはまた違った、不思議な魅力を持っています。木を割った時の切断面、節や鑿跡をそのまま残し、木という素材の魅力をダイナミックに引き出した円空仏のすがたは、今もなお人々を惹きつけてやみません。



写真1 円空作  
役行者倚像（個人蔵）

この度の展示では、埼玉県内の円空仏の優品を御覧いただきます。

円空仏というと「素朴」や「温かみのある」などと表現されることが多く、ともすれば簡素な作りの仏像のように思われるかもしれませんが、その造形の

巧みさ、その見事な鑿跡に驚かされます（写真2）。ぜひこの機会にじっくりと御覧になってみてください。

各地に足跡を残し、これほどまでに我々を魅了する仏像を数多く制作した円空その人については、実はほとんどわかっていません。



写真2 役行者倚像（個人蔵）部分

貫前神社（群馬県富岡市）旧蔵の大般若経奥書によると、円空は寛永9年（1632）、美濃国（現在の岐阜県）に生まれたといわれています。やがて円空は、十萬の仏像を造像するという願を立て、元禄3年（1690）、遂にそれを達成したとされています。元禄8年

（1695）に円空が入定するまでの間に、全国各地でこれまでに五千軀以上の円空仏が確認されており、像の種類も豊富で、二百種類ほどの仏像・神像があります。関東では埼玉県で最も



写真3 円空作

多くの円空仏が確認されており、像の種類も豊富で、二百種類ほどの仏像・神像があります。関東では埼玉県で最も多くの円空仏が確認されており、その数は約170体以上にも及びます。なかでも春日部市や蓮田市、さいたま市（うち旧大宮市域）などの東部地域に集中しており、江戸から日光へ向かう際に立ち寄ったためではないかと考えられています。前述の大般若経奥書（貫前神社旧蔵）や、天和2年（1682）銘の栃木県鹿沼市広濟寺の千手観音菩薩像などの存在から、この頃に関東で活動したと推定されていますが、古文書などの記録類は確認されておらず、埼玉を訪れた時期や回数など詳しいことはわかりません。埼玉での円空の作品は、初期のものは確認されておらず、像の所在から、ゆかりのある修験寺院を訪ねたものとみられています。また、道中、宿泊の謝礼として仏像を造ったという伝承もあり、それを裏付けるように、個人宅で確認されることもあります。

円空は、山に籠もって厳しい修行を行う修験の僧であったと言われていています。埼玉県には、日光山へと向かう日光街道が通っていました。日光山は古来山岳信仰の聖地であり、修験の場であることから、円空は日光山での修行のために日光街道を通ったのかもしれませんが、厳しい修行のための道中で、「素朴」で「温かみのある」表情を持つ仏像を多数制作した円空。ぜひこの機会に埼玉の“円空さん”を拝して、その足跡に思いを馳せてみませんか。

（展示担当 西川真理子）

## 新 収 集 品 展

2016 ・ 2017

5月19日(土)から6月24日(日)まで「新収集品展 2016・2017」を開催し、平成28年(2016)・29年(2017)度に受け入れた62件890点の資料から、68点を県民の皆様にご紹介しました。

今回の展示資料の中から代表的なものを、以下にご紹介いたします。

### 春秋庵関連俳諧資料(写真1)

春秋庵の俳人であった文廣庵叢札が所有していた加舎白雄の俳諧入門書『俳諧寂菜』や、句合の資料『道の菜』などの春秋庵俳諧資料が寄贈されました。春秋庵は、白雄が東京・日本橋に開いた俳諧の庵で、江戸中期には俳諧の世界を代表する結社でした。白雄は献身的に松尾芭蕉の顕彰をし、句に情感を読み込む主情派の句をよくした人物で、「人恋し灯ともし頃を桜散る」という名句で知られています。毛呂山町出身の川村磧布は白雄没後、『しら雄句集』を編纂し、師の功績を讃えるとともに、春秋庵庵主を継いでいます。本資料も、埼玉県と春秋庵の深いつながりを示しています。



(写真1)

### 橋本弥喜智商店鯉のぼり関連資料(写真2)

明治41年(1908)に開業した鯉のぼり屋の橋本弥喜智商店に伝わった資料です。看板、目型や、和紙手描き鯉のぼり、布製手描き鯉のぼりの完成品をご寄贈いただきました。加須市での鯉のぼりの生産は、明治時代、提灯や

傘の職人が副業として制作し始めたことから始まりました。当時は和紙の鯉のぼりが普通だったといえます。その後、大正年間には木綿の鯉のぼりが開発され普及しましたが、昭和30年代以後、ナイロン製の鯉のぼりが一般的となりました。橋本弥喜智商店は、あえて時流に染まらず、和紙・布製の手描き鯉のぼりを制作し続けましたが、惜しまれつつ平成28年(2016)に廃業しました。



(写真2)

### 慰問袋(日露戦争期)(写真3)

日露戦争期、日本基督教婦人矯風会から戦地にあった埼玉県出身の兵士あてに送られた慰問袋です。日本基督教婦人矯風会は、明治26年(1893)に発足し、廃娼運動、一夫一婦制を進めた団体です。日露戦争期、積極的に戦争協力を行い、22,000個の慰問袋を戦地に贈りました。袋表の背景には、陸軍の象徴である旭日旗、海軍の象徴である三つ山形に桜と錨の旗が描かれ、下方に花が描かれています。裏には富士山を背景に、宮城(現皇居)前で提灯を掲げ、万歳を唱える民衆が描かれています。



(写真3)

(資料調査・活用担当 佐藤香里)



## 悲劇の貴公子から悪人へ—清水冠者の物語—

しみずのかんじゃ

主役を凌ぐ人気を誇ることもある悪役。みなさまも悪役に魅入られた経験があるのではないのでしょうか。今年度は悪をテーマにした展覧会が都内各地で開催されるなど、悪への関心が高まっています。

今回は、江戸時代に悪役として名を馳せた、埼玉県にゆかりのある人物をご紹介します。

その人物は、木曾義仲の遺児で源頼朝の婿であった、清水冠者義高（名前については諸説ありますが、ここでは以下義高と称します）です。埼玉県の入間河原で幼くして哀れな最期を遂げた少年の話を、みなさまも聞いたことがあるかもしれません。義仲と頼朝の身内争いに巻き込まれ、婿とはいいながらも実質は人質として鎌倉にやって来た義高でしたが、義仲と頼朝の対立は解消されることなく、義仲は朝敵として源義経軍に討たれました。その余波をうけ義高も入間河原で誅殺されるのです。義高と婚姻関係にあった頼朝の娘大姫とは良好な間柄であったと伝えられているだけに、悲恋の物語としてもよく知られています。彼らの悲劇はいわゆる御伽草子「清水冠者物語」にも書かれ、室町時代末頃には絵巻や絵本なども作られていました。この物語のなかにはなんと、大姫が義高の死を嘆き実の父頼朝を恨んで死後に怨霊となったとする筋書をもつものもあります。



「清水冠者 3巻」 国立国会図書館デジタルコレクションより

余談を挟んでしまいましたが、この哀れな物語の主人公・義高が悪人へ変貌している物語が、江戸時代に入って散見されます。中でも義高を悪として書いた作品の一つである、曲亭馬琴作、葛飾北斎画の「頼豪阿闍梨怪鼠伝」は、文化5年（1808）に刊行

された大作です。この作品においては、入間河原で誅殺された義高は影武者で、本物の義高は生きていたという設定で物語が展開します。義高は父義仲を手にかけて石田為久への敵討ちを志し、その上それを成し遂げただけでは飽き足らず、頼朝までも討とうとします。結局それは未遂に終わりますが、敵を討つためには手段を選ばず大姫さえ利用する非道ぶりや、石田為久を必要以上になぶり殺しにする場面には悪のオーラが漂います。加えて、鼠を自在に操る妖術師となっているのもこの作品の魅力です。大きな鼠や無数の小さな鼠を妖術で出現させ、敵討ちを阻む者の目くらましをする場面も見どころです。こうした悪の義高は歌舞伎でも演じられ、鼠小僧などの盗賊のキャラクターと緋い交ぜの人物



像で登場することもありました。

このような敵討ち・妖術師・盗賊といった要素は、当時江戸時代の人々を魅了した要素でもあります。赤穂浪士の敵討ちや、盗賊（義賊）の石川五右衛門は

「大日本六十余州之内 近江 よく知られている例で志水冠者義高」国立国会図書館 デジタルコレクションより じて、前述のような悲劇の物語を背景に悪人の義高が作り出され、また義高の悲劇に哀れみを抱いていた人々の同情があったからこそ、悪の義高が知られるようになったのではないかと考えます。行いは悪でもなぜだか心を惹かれてしまうのは、ただの悪ではなく、悪の道に踏み込む経緯を抱えた物語があったからこそだと思います。

今回は清水冠者義高の物語を紹介しましたが、そうした魅力的な悪人は義高以外にもたくさんいますので、みなさまのお気に入りの悪人をぜひ探してみてください。（企画担当 戸島みづき）

## 学芸員から見る！ゆめ・体験ひろばの1日

博物館正面入り口から入って、右手にお進みください…「ゆめ・体験ひろば」へ、ようこそ！ここは、子供から大人まで、幅広いみなさまに楽しんでいただける当館の体験学習ゾーンです。今日はゆめ・体験ひろばの1日の様子を、学習支援担当の学芸員の視点からご案内します。

＼ゆめ・体験ひろばってこんなところですよ！



写真1 左から「自由自在座」「ものづくり工房」「昭和の原っぱ」、これら3つのエリアで構成されています。

## 【AM8:30】～開館まであと30分・準備～

ゆめ・体験ひろばの朝は、開館時間の30分前から動き出します。みなさまが朝早くから体験を楽しめるよう、学芸員や協力して下さる体験ボランティアの方々とともに準備を始めます。ゆめ・体験ひろばで出来る通常体験メニューは、埼玉ならではの「まが玉」や「藍染めハンカチ」を作る体験などさまざま。それらすべての体験メニューの準備を、開館前の30分間で迅速に行っています。準備のうちのひとつ、たとえば藍染めハンカチで使用する藍甕は、毎日のチェックが欠かせません（写真2）。毎朝藍の状態を、試し染めをして確認しています。



写真2 当館にある藍甕の水深はなんと1m！

## 【PM1:00】～午後からのリスタート～

午後は1時からチケットの発券を再開！たくさんのお客さんと賑わいます。（11時半から1時まで発券を中止していますので、ご注意ください。）

さて、さまざまな体験ができるゆめ・体験ひろばですが、もしかしたら見落としている体験メニューもあるかも？ということで、私のおすすめスポットを紹介します。

私がおすすめる体験は、自由自在座に設置されている「衣装体験コーナー」（写真3）。みなさまに無料で着ていただける昔の衣装を、季節によって時代を替えて準備しています。展示室で資料を見たあとにその時代の衣装を着てみると、より一層資料への思いを膨らませることができるはず。（今年の夏は、縄文・弥生時代の衣装を展示する予定）ぜひ利用してみてください。



写真3 自由自在座「衣装体験コーナー」たとえば、こんな写真も撮影できます。

## 【PM4:30】～閉館（7・8月は5時まで）～

みなさまに来館していただいた後の昭和の原っぱは、写真のように、次の日に備えての休憩時間に入ります（写真4）。これからも長くみなさまに見て、体験していただくための資料として大切に保存しているのです。



写真4 閉館後の昭和の原っぱの様子

ここではゆめ・体験ひろばの日常のほんの一部を見ていただきました。新しい発見が、ありましたか？これからも、みなさまが当館でゆめ・体験ひろばを活用し、充実した1日を過ごしていただけるよう学芸員として努めてまいります。自分だけの楽しみ方や過ごし方を見つけてみるのも良いですね。「ゆめ・体験ひろば」でお待ちしております。（学習支援担当 前田伽南）